

授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ(1)

田邊 祐司 Tanabe Yuji
(専修大学)

1 はじめに

話し方は授業マネジメントに大きく関わる大切な領域です。それにもかかわらず、教員養成課程で真正面からこれを取り上げた講義を受けた記憶は私にはありません。みなさんはいかがでしょう。等閑視されてきた感がある領域ですが、熟練教師3人の勘どころはいかなるものなのでしょうか。今回は話の構成、声や姿勢、立ち位置など、いわゆるプレゼン技術を、当然挙げてくるのだろうと予想していましたが、これが「あにはからんや」の世界で、彼らが指摘したのは話し方以前の問題でした。

2 信念

虚を突かれた最初の勘どころがこれです。先生達が指摘したのは教師側の教えようとする「意欲」の大切さでした。A先生は次のように語っています。

教師の語りの根幹にあるのは何としても生徒に「力を付けさせる、力を伸ばしてやる」との信念、熱意とでもいうべきものと思います。教師ならおよそ誰もが持ち合わせているとは思いたいのですが、最近では事情が違ってきています。マニュアル通りに、知識の伝授を、それも機械的に行う教師が増えていると強く感じるのです。その話しぶりには覇気がない。昔、「デモシカ教師」や「サラリーマン教師」というフレーズが流布した時代がありましたが、今はその「3代目」が現場に押し寄せているのです。こうした経験から、教師の話し方について意見を求められるときには、まずこのキホンのキへの「原点帰り」の大切さを強調するようにしています。

3人ともこの見解に大きく首を縦に振っていたの

が印象的でした。C先生もこう続けました。

そうした先生方へ伝えたいのは、教師側の教えたいという気持ち(ある教育学者はこれを「教える側の意欲」といっています)は、たちまち生徒に伝わるという事実です。そういう内面からわき上がる思いがあって初めて、話し方の構成や delivery (伝達) などの技術論に行けると思います。

彼らの話を聞いて、ともすれば技術面を追いがちなところがある私は、ハッとしました。いろいろな要因が複雑に絡み合っているのですが、確かに「デジタル世代」「草食世代」に育った若手教師の中には、「生徒の力を伸ばすんだ」という祈りにも似た信念をもとにして、生身の人間である生徒と接した体験が少ないのかもしれない。世間一般に言われる若者の「コミュニケーション能力不足」は、やはり教育界にも押し寄せていると感じた次第です。

3 自信

2つ目の勘どころも想定外。彼らの教える内容に対する確固たる自信に関するものです。まずは、B先生のことばです。

「英語に自信があるかないか」ということを、プロの英語教師に問うのは失礼なことかもしれませんが、それでも英語は生き物です。これまで事実だと思ってきたことが、時代の流れとともに崩れる場合だってあるのです。例えば、初めて人に会ったときの挨拶の定番を“How do you do?”と教えてきました。しかし、これが生徒同士となると、いかに奇妙に響くかというのに気づいたのは、恥ずかしながら最近のこと

でした。語用論的な情報は、自分で意識的に update していかないと言語事実は伝えられないし、自信が揺らいでしまいます。また、この自信のなさというものは、話し方に反映され、即、生徒に伝わります。

C先生も同じく「自信の有無は話し方に出ます。自信がないものは語りへは昇華されません。信念とともに、自信は話し方の両輪の一つだと思います。」と述べ、技術論偏重へと警鐘を鳴らしています。これにも一本とられた思いです。

4 指導案

年間計画やレッスンごとの指導案をきちんと把握していることも、話し方に影響を与えると彼らは考えています。まずはB先生のことばです。

年間計画は、学校の授業の進度、学習の到達度に関連し、それに合わせて授業デザインをしていくための「大枠」です。問題になるのは、各教師の授業展開をイメージした授業案で、私たちはこれを「小枠」と呼んで細心の注意を払っています。ベテランになったら、この小枠を省略してもいいと考えていると、それはとんでもないこと。授業の「導入」「展開」「まとめ(終末)」の小枠がしっかりしていてこそ、メリハリのある話し方ができるのです。

これにA先生は次のように続けました。

伝統的な指導案では、何となく頭に授業イメージが残りにくく、自前で適当な指導案を作成していました。そんなとき、田邊先生から教わったのが「パラグラフ・チャート(パラチャート)」です。これは、高校向けに学芸大の先生方を中心に考案された授業の大まかな流れを図式化したチャートです(金谷(編), 2011)。図式化の良さは、“WYSIWYG (What you see is what you get.)”です。つまり、パッと見てその授業の流れを把握できることです。これがあると授業の構成がすっきりと頭に残り、その分、話し方にもメリハリが出てきたと思います。

このように、指導案がしっかりできていると、自分に余裕ができ、その分話し方の技術面にも気を配ることができるのです。

5 教材研究

最後の勤どころは、「自信」と密接に関係する教材研究です。C先生のことばです。

自分のバイブルとしているのが、以前、田邊先生が『英語教育』(大修館書店)で紹介された『わたしの英語遍歴—英語教師のたどれる道』(田中, 1960)です。その中に、テキストを一字一句漏らさず、徹底的に調べ上げて授業に臨み、語源から文法事項まで、生徒達から矢継ぎ早に質問を浴びせかけられ、それを乗り切ったあと、学校裏の丘の上で「勝った!」とつぶやく場面があります。徹底的な教材研究は、教師の話し方を論じるためには、なくてはならない勤どころだと思っています。それは教師の話し方に迫力をもたらすと考えています。

田中菊雄に言及していただき感激です。教科以外のことで忙殺され、教材研究にじっくりと時間をとることができないのが現状でしょうが、そんな中にあっても教えることをしっかり事前におさえる。この基本が話し方の素地になるという考えには全面的に賛同します。

以上、お三方ともに話し方の前段階での勤どころを挙げられたわけです。まずは生徒を伸ばそうとする「意欲」、そして普段から学び続けることによって形成される「自信」。さらに、綿密な「授業地図」とともに、綿密な「教材研究」。どれもこれも当たり前のことかもしれませんが、そうしたことが実は教師の話し方を成功させる勤どころであるという指摘には、ただただ脱帽です。次回は、話し方そのものの勤どころを取り上げてみます。

【参考文献】

金谷憲(編著) 高山芳樹ほか(著)(2011). 『高校英語授業を変える! 訳読オンリーから抜け出す3つの授業モデル』アルク.
上篠晴夫(2010). 『教師の話し方 スピード★上達法 すぐ生かせる36のコツ』たんぽぽ出版.
齋藤孝(2004). 『齋藤孝の相手を伸ばす教え方』宝島社.
田中菊雄(1960). 『わたしの英語遍歴—英語教師のたどれる道』研究社出版.